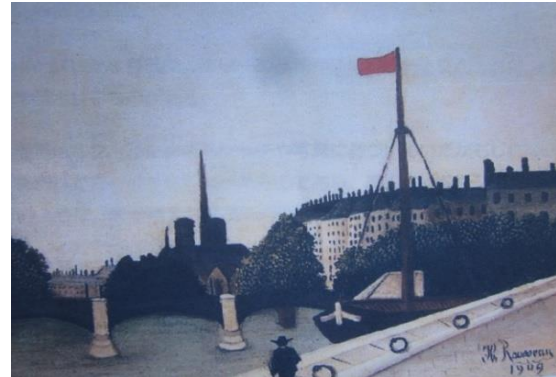


全員巨匠！ フィリップス・コレクション展

三菱一号館美術館（丸の内） 2018.10.17～2019.02.11

「フィリップス・コレクション」は、1921年にアメリカでは最初の私立の近代美術中心の美術館として開館し、まもなく100周年記念を迎える美術館で、そのコレクションは“質の高い作品ばかりである”ことで知られている。

本展は、この世界有数のコレクションから19世紀の巨匠「アンデル、コロ、ドラクロワ」等、近代絵画の父「マネ」、印象派の「ドガ、セザンヌ、モネ」、ポスト印象派の「ゴーガン」、そして新しい美術を切り開いた後継の「ボナール、クレー、ピカソ、ブラック」らの秀作「およそ75点」が展示されている。



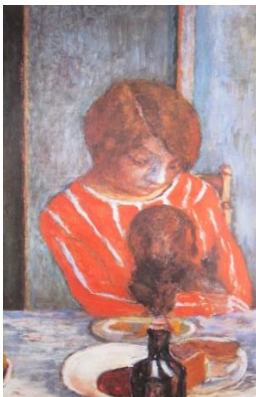
カミーユ・コロー 《ローマのファルネーゼ庭園からの眺め》 1826年カンヴァス

画伯は、度々イタリアを訪れて数多くの「風景画」を描いているが、本作は光と陰を大胆な筆使いで表現して、明るいイタリアの光に古代ローマの憧れも込めて、“数多くの遠景建物に反射させた点秀作”とされる油彩画作品である。

アンリー・ルソー 《ノートルダム聖堂》 1909年 油彩/カンヴァス

絵画の構成が単純で鮮やかな色調は、画伯の後期の作品に見られるもので、フランス人としての視点やパリに対する愛を描き出して、ステッキを持った人は画家自身の縮小画である可能性があり、絵画は静かな郷愁を醸し出している。

ピエール・ボナール《犬を抱く女》 1922年 油彩/カンヴァス



画伯の斜めの構図の好みは、初期の石版画時代から最晩年に至るまで一貫していたが、本作品はふとした静かな時間に、女性モデルが茶色の子犬を抱いて下を向き、テーブル上には食事と茶色のワインのボトルが置かれている構図である。

頻繁に使われる格子縞のブラウスやテーブルクロス模様の描写は、ただ単にまがりくねった線の上につけ加えるだけで表現されているが、視覚的にも色彩的にも十分絵画効果を高めている作品であると評価されている。